

黒馬車

宮本百合子

青空文庫

時候あたりだろうと云つて居た宮部の加減は、よくなるどころか却つて熱なども段々上り氣味になつて來た。

地体夏に弱い上に、此の間どうしたのか頭の工合を悪くして三日ほど床について居た揚句にたべたかつおの刺身がさわつたのだと云う事は確な事であつた。

「まあほんとに不養生な、

しらみ

白肉のでさえたべない様にして居るのにねえ。

あんなに云つて置いたのをきかないからなんだよ。

と主婦は顔をしかめながら、例の人の難儀をすてて置かれない性分で早速、医者を迎えた。今じきにあがりますと云いながら、夕

方になつても来て呉れないので、家の者は、書生が悪いと云つたので一寸逃れをして居るのだろう、お医者なんて不親切なものだなどと云い合つて居た。

物に熱し易い娘は、

人の命の色分けはないじやありませんか、もう一度そう云つて見ましようよね。

若しそいで来なけりやあ私云つてやる。

と怒つた太い声を出して云つたりした。

手洗の水までそろえてまつて居るのに来て呉れないので娘は到々催促の電話をかけた。

午前中からおたのみしてあるのに御都合がつきませんでしよう

かと、あんまりいかめしい調子で云い迫ったので向うの奥さんらしい声はへどもどしながら、少し工合が悪くて横になつて居るが、もうじきあがる様に申して居りましたと返事するのをきいて、常套手段の少々加減がを腹だたく思わないわけには行かなかつた。

夕飯の仕度にせわしい頃漸々来て呉れた医者は、
どうも、チブスの疑があると云つて歸つて行つた。

家中の者は、万更思わぬではなかつたけれども、こう明らさまに云い出されると、今更にはげしい不安におそわれて、どうぞそうなりません様にと**思う**傍ら、いならずま電の様に避病院の黒馬車と、白い床の中に埋まつて居る瘡せほうけた宮部を一樣に思い浮べて居た。

今まで通つて居た便所に消毒薬を撒いたり、薬屋に□□錠の薄

める分量をきいたりしてざわざわ落つきのない夜が更けると、宮部の熱は九度一分にあがってしまった。

台所では二つの氷嚢に入れる氷をかく音が妙に淋しく響き主夫婦は、額をつき合わせて何か引きしまった顔をして相談して居るのを見ると娘は、じいっとして居られない様な氣持になって、何事も手につきかねた風に、あてもなくあつちこつちと家中を歩き廻つて居た。

親元に報じてやる手紙が出されるのを見てから赤子のわきに横になりはなつても、自分が経験した病氣に対する、あらゆる悲しさや恐ろしさが過敏になつた心に渦巻きたつて、もうどうしても死なねばならないときまつてしまった様な嚴な氣持になつたりし

て、いつとなし眠りに落ちるまで、もごもごと寝返りを打ちつつけて居た。

明る朝は誰も彼も起きぬけに宮部の容態を気にしあつて、夜中に二度ほど行つて氷をとりかえてやつた女中は、そこいら中で捕えられて喋らされた。

いつ行つても、天井を見て起きて居るんでございます。

きつと一晩中まんじりともしなかつたんでございましょうよ、可哀そうに。

他人の中で病む^やほどつらい事はございませんものねえ。

此処へ来て一日ほど立つて、指をはらして二月も順天堂に通つた事のあるその女中は、ほんとうに思いやりがあるらしく涙声で

云った。

その日一日八度から九度の間を行き来して居た宮部の熱は、夜になつても別にあがりもしなかつた。

それでも病人の部屋のわきの竹縁に消毒液をといた金□がならんであつたり、氷の音がしたりすると、皆は、いやなものをさしつけられた様な氣持になつて不安げなつぶやきが低く起つた。

それから二三日は何の変りもなくつて退屈に立つて行つたが、五日目に七度二分に熱つた時には、皆がもう生き返つた様な面差しになつて、

「もう大丈夫ですよ、ええ。

チブスなら、どんな事があつたつて今頃下るつて云う事はな

いのです。

それに、先生が云つていらつしやつたけれど、何にも下熱剤をつかつてないと云うんですもの。

まあまあ何よりでしたねえ、

今夜からよくねられる様になるでしょう。

主婦などは、そう云つて自分の事のように喜んで、わざわざ、宮部の部屋まで出かけて、

もう大丈夫だから安心して早くよくおなり。

となぐさめて居たが、六日七日と立つにつれて又元に戻った熱は下り様ともしなくなつた。

不安がまた人の心にはびこり出した。

どうも、変だと云つて□の反応をしらべた医師の報告は一更おびえさせて、無智から無精に病をこわがる女中共は、台所にたつたまま泣いたりし始めた。

当人には云わずに居た事だけでも、種々の様子からいつとはなし悟つたと見えて、

僕、どうしたつてチブスなんかにはあならないよ。

黒馬車にのつけられるのはいやだもの。

と云つたと云うのをきいたりすると、いくらしつかりして居ると云つたつて二十前の息子が他人の家で病う氣持が思いやられて、娘は、他人事でない様な、只書生の云う事だと云いきつてしまわれなような深い思いやりが湧いた。

進みも退きもしない容態で十日ほど立ったけれども医師の診断はどうしても違わないと云う事になって来た。

チブスならパラチブスで極く軽いのだけれどもお家へお置きなさるのはどうでしょうと、主婦が神経質なのを知って居る医師が病院送りの相談を持ちかけたけれども、他人の息子をあずかつて居ると云う事に非常な責任を感じて居る主婦は、出来るだけの事はしてやるつもりだからもう四五日しての様子を見ると云って断ってしまった。それなのに、誰も知らない内に、

お前避病院に行っちゃあどうだい。

といきなり当人に云ったと云う医者態度があまり親切気がない様で切角主婦がああ云って居るのにそんな事を云っていやな思い

をさせずとも、娘はすっかりいやな氣持になつて、

医者なんてまるで冷血動物だ。

死にかかった病人に、お前もう死ぬよと云えるのはお医者な
んです。

ほんとうに思いやりがないじゃありませんか。

こつちに先に相談して、若しやるとでも云つたら、その時に
なつて、おだやかに云つてやつたつてわけの分る事だのにねえ。

お前避病院に行かないかい。

なんてあんまり人を馬鹿にして居る。

自分のためにそうして置いた方が安全だからですよ。

と母を相手に散々腹をたてた。

日に幾度も幾度も娘は境の障子の外から、

どんなだい、

熱は？

とたずねてやって居たけれども、小さい弟共の事などを思うと、
思い切つて中に入つて見る事もしかねたし又骨だった顔を見る事
もつらかった。

牛乳と、スープと重湯を時間をきめてたべさせるさしずに主婦
は常よりも余程いそがしいらしかつた。

只猫可愛がりになり勝な二十七になる女中は、主婦がだまつて
居ると、涼しい様にと、冷しすぎたものを持って行つたり、重湯
に御飯粒を入れたり仕がちであつた。可愛がつて、自分の子を殺

して仕舞う女はこんなだろうと思うと、只無智と云う事のみが産む種々雑多のさい害のあまり大きいのを怖ろしがらずには居られなかった。

十二三日目になった時、様子を見に行つた主婦は、氣味悪く引きしまった顔になって歸つて來た。

どうも面白くないねえ。

物を書いて居た娘のわきに座りながら云つた。

どうして。

「まるで声が変わつてしまつて居るのだよ。

それにもう疲れて便所へも行かれないんだって、だから、どうしてもチブスなんだねえ。

でも考えて見ると、去年お前が悪かった時なんかは九度以上の熱が十日以上続いて居たが、つかまって便所へは行けて居たからねえ。

そうして見ると、よつぽど悪性の熱だと見える。

どうかしなくちやあならない。

その晩早速、親元へ電報を打ってやった。

只身の廻りの世話位なら誰もいやがるものもないけれども、何から何までとなると、女達も気の毒だし、第一、思う様には手が廻らないのが分つて居る。

その上世話をするのもいいけれどいろいろな物に手をつけた体で子供の事をするなどはいくら消毒したと云つても危険であるか

ら親を呼んで相談して見ようと云う主婦の意見に反対する事は出来なかつた。

翌朝早く停車場からすぐ来た宮部の実父は、あまり息子に似て居ないので皆に驚ろかれた。

体の小柄な、黒い顔のテカテカした年より大変老けて見える父親は、素末な紺がすりに角帯をしめて、関西の小商人らしい抜け目がないながら、どつか横柄な様な態度で、主婦の事を、

お家はん、お家はん。

と云つて、話して居た。

此方こちらで種々手厚くしてやる事をあたり前だと云う様な調子で聞いて居るので、感謝されるのが目的でした事ではないと云つても

あんまりよい氣持を起させなかつた。

「ちつとも朴突なうまみのあるところがない

と主婦はいやそうに云つて居たけれども、添え手紙をもらつて医者に話をきいて來た男の様子は、皆が可哀そうがつて、涙組むほど、しおれて心配げに變つて見えた。

急にぎわめきたつた家中は、電話のはげしいベルの絶間ない響と、急にひどくなつた雨の騒々しさに満たされて、書齋に物を書いて居る主人と娘は居たたまれない様にあちこちあるき、主婦は何か考えに沈んだ様にしてじいつと椅子から動かなかつた。

避病院に關しての迷信、

子供の間から、駒込に曲つて行く黒馬車や吊台を見るとにげる

くせのついて居る娘は、家に居るよりは本人のためになるとは知りながら、何だか悪い事のある様な、恐ろしい気持にならずに居られなかった。

「なおるでしょうねえ。

と云つて、

「どうしてそんな事を云うのだい。

なおるものはなおるに定まつて居るじゃあないか。

馬鹿な事を云う人だ。

と叱られたりした。

主婦は、斯うしたかなりの家から駒込送りの病人を出した事を非常に恥辱の様に思い、子供達は気味も悪がり、女中共は涙をこ

ぼし、主は、

「道德だの頭の程度の違うものと生活するのはよくない事だ。」と云つて居た。

斯うした種々の気持は皆一まとめになつて物音もしない熱氣の漲る病人の小部屋にながれて行くのであつた。わびしそうな姿をして、口をもきかずに息子のわきについて居る父親は、自分の子をつれて行く黒馬車を待ちながら堪えられぬ怖れに迫られて居る様に、時々土間に下りては、暗い中を、遠い門の方をながめてぼんやり立ちくらして居るのを見ると、女親の様に、涙も気ままにこぼせない意地で保つ心根が、何かやさしい言葉をかけて、なぐさめてやりたいほどに思われた。

雨の夜は更けるのが早い。

娘は、自分の書斎の机の前に座って白いまま重ねられてある原稿紙をながめて下目をしたまま身動きもしなかった。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒馬車

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>